

社会理論の遺伝子 - 文化共進化理論的展開

日本女子大学 三原武司

1 目的

本報告は、社会理論に進化理論や神経科学など生物学的知見を導入することにより、社会理論の基礎づけと発展の方向性を提示することを目的とする。

2 方法

アンソニー・ギデンズの構造化理論に生物学的知見の導入を試みる。まず、ミクロとマクロの関係について、構造化理論と遺伝子 - 文化共進化理論のなかからニッチ構築理論の概要を説明し、双方を比較する。つぎに、構造化理論における行為理論に神経科学的知見を導入し、基礎づけをおこなう。関連して、ニクラス・ルーマンの社会システム理論についても言及する。

3 結果

構造化理論は、選択圧のフィードバックを追加すればニッチ構築理論として展開可能である。これはニッチ構築理論側から指摘されているとおり、双方が同じ理論的枠組みをもつことによる。行為理論の階層モデルについては、いわゆる二つの認知システムが基礎を提示しうる。階層モデルにおける再帰的モニタリングは、ギデンズの理論的予見を敷衍すると、現在ではミラーニューロンがその基礎のひとつとなる可能性が高い。また、ルーマンは社会システム理論を展開する際に遺伝子 - 文化共進化理論に言及しており、こちらも選択圧のフィードバックを追加すれば共進化理論として展開可能である。

4 結論

ギデンズは、進化理論をはじめとする生物学的知見から慎重に距離をとってきたが、現在では双方の親和性が確認できる状況になっている。近年、社会理論への生物学的知見の導入は、ジョナサン・ターナーやロバート・ベラーをはじめとして急速に進展中である。経済学、政治学、法学、社会心理学など人文社会科学の近接領域でも、同様の研究動向がすでに多くみられる。他方、進化理論の立場からも人類史を論じた大著が頻繁に上梓されている。各領域にわたって共通の人間観が採用されはじめたことがうかがえる。この潮流は、社会理論の全体性を再構築する手がかりとなりうるのではないだろうか。

文献

- 三原武司, 2013, 「構造化理論と社会システム理論のニッチ構築理論的展開——遺伝子 - 文化共進化の社会理論」『現代社会学理論研究』7: 54-66.
- , 2011, 「ギデンズの構造化理論における無意識的次元の強化——生物学的知見の導入と情報社会論への応用可能性」『現代社会学理論研究』5: 133-45.
- , 2010, 「再帰性の起源としてのミラーニューロン——ギデンズ社会理論の生物学的根拠」『年報社会学論集』23: 165-75.